

詞、序詞、本歌取りといった和歌の技法を駆使した技巧性に驚く。この歌集の素晴らしさは瑞々しい口語と短歌の技巧との絶妙な組み合わせにあったのだと痛感する。

・あいまてののちの心の夕まぐれ君だけが
いる風景である

依 万智

この歌はもちろん百人一首の名歌「あひみてののちの心にくらぶれば昔は物を思はざりけり」(藤原敦忠)を本歌取りにした歌だが、本歌にはない夕暮の風景が浮かび、下句の「君だけがある風景である」というちょっと理屈っぽい言い回しから恋をした、しかし恋に溺れこまない二十世紀の女の子の浮き上がりが上る。「サラダ記念日」は人々に短歌は誰にでも作れそうに思わせたが、実はこの歌集は相当修練を積んだものにして詠めない歌が並んでいる、膨大な和歌短歌の遺産を背負った歌集だ。

その後の口語短歌ブームは、身近な言い回しを取り入れる事の方に進み、記号やアルファベットを取り入れ、より刺激的にすることに腐心するようになったと記憶する。そうなる心短歌は通俗的になり、詩としての命を失う。そんな危機感を経た後、大森や敷内といった詩情豊かな、文学性を感じさせる新人が生まれたのだろう。

ただ一方で、短歌が詩性や文学性に傾くと、必要以上に難解でわかりにくい歌がもてはやされるようになり、言葉が先行し、実体のない言葉遊びに終始する歌が増えるのではないかという危惧が生まれる。

佐佐木定綱の引いた伊藤一彦の論に反す。伊藤は馬場あき子の

・秋の日の水族館の幽明に悪党のごとき
臆を愛す

馬場あき子

を引いて「われわれは何かの対象を覗いて歌を作る。問われているのは、対象を覗いてる自分自身である。自分が日ごろの人生や社会について何をどう考えているか、そのことによって対象の覗き方は違ってくる。そして、覗いたもののなかから素材としてどれを歌に採り入れ、それをどんな含蓄のある適切な言葉で表わすか。右の馬場作品の『幽明』や『悪党』の語の揺るぎなさや『幽明』と述べている。伊藤は水族館で見た臆を「幽明の水牢に閉じこめられているように思えた」という馬場の自注を紹介しながら、古典や古典芸能に精通している馬場だからこそ水族館を「幽明」と、臆を「悪党」と表現しえたと言っているのだ。

短歌はたった三十一音の短い言葉で成り立つ。しかし、その三十一音の言葉は海面

から出ている氷山の一角に過ぎない。水面下には膨大な作者の世界がなければ成り立たない。そもそも人間のコミュニケーションにおいて言葉の占める割合は実はそれほど大きくない。表情・しぐさ・声のトーン等々が言葉以上に大きく働く。ましてや世界を構成する森羅万象の中で人間の言葉は一つのツールに過ぎない。もちろん短歌は言葉によって表現する、言葉に依存する存在だ。しかし言葉に頼りすぎてはいけない。言葉だけの実体のないものになってはいけない。三十一音の水面下に見えない世界の広がりを感じさせなければならぬ。

では見えない世界とは何なのか。それはその作者の経験や感情の豊かさ、知識や思索の深さであろう。伊藤の言う「含蓄」というのもこれに当たる。それがない言葉だけの短歌は海に漂う氷の一片からだ。自分の世界を支えられた借り物でない自分の言葉での表現、それが氷山の一角になりうる。

歌壇には流行がある。時代によって、口語が流行ったり、詩的飛躍が求められたりする。しかし、どんな素材を選び、どう表現するにしても、歌を支えるのは自分自身の広く深い世界である、ということをお忘れなさい。